

### レフェリーの卵たちも奮闘中

日本協会審判部の新施策「ヤングレフェリー養成プロジェクト」に、岩手県がいち早く着手している。

9月30日の日本リーグ岩手大会では池田永一君（盛岡商高1年）、漆真下 暁君（盛岡大附高1年）、佐々木太一君（北松園中2年）の3人が、県内A級レフェリーのマンツーマン指導を受けながら、小学生のエキジビジョンマッチの笛を吹いた。「手をしっかりあげろ」「笛が小さい」「ジャッジの判断があやふや」「プレーヤーより速く走れ」などと注意を受けながら汗びっしょりのレフェリング。試合後は「なかなかむずかしい」「緊張した」「勉強になった」と感想を口にした。

チームでは中心選手として活躍中。レフェリーをやろうとしたきっかけは、「ずっと長くハンドボールに関わっていたいから」（池田君）というのが共通した思い。このほか女子1人を含めて4人が“修行中”という。すでにスコアシート記入などオフィシャル研修もすませ、ゲーム実技とペーパーテストに合格すればライセンス取得という段取りだ。

東北と岩手県の審判長を兼務する田村登さんは「のみ込みの早さは驚くほど。レフェリーをやるのは子供たちの将来にプラスになるはず。今後も岩手県が全国のモデルケースになるつもりで力を注いでいきます」と拘負を語っていた。

### 「サッカーのヤングレフェリー育成に関わる質問に対する回答とアドバイス」

2006年6月15日

(財)日本サッカー協会審判部レフェリー・チーフ・インストラクター  
小幡 真一郎 氏

「私の現在の役職は(財)日本サッカー協会(以下 JFA)の審判チーフインストラクターで、職務はSR(スペシャルレフェリー:6人のプロの審判員)の指導を中心にしたトップレフェリー(1級審判員105人)の強化です。しかし、昨年までは若手審判員(25歳未満の2級審判員)をトップレフェリーにするためのJFAレフェリーカレッジのマスターとして立ち上げの責任者を務めていました。元来、4年前までは京都府で高校の教師をしていたこともあり、中学・高校生の審判育成にも関わった経験があります。

また、サロンの堀 美和子さんを通じて(財)日本ハンドボール協会の島田審判委員長とも審判の育成・強化についてお話しをさせていただいたことがあります。

さて、ご質問の件について、現状のサッカーにおける取り組みという観点から回答させていただきます。なお、前述の通り、現場とのズレはご容赦下さい。

また、サッカーが決して進んでいるわけではなく、同じような悩みや課題を抱きながら取り組んでいることもご承知下さい。

#### 1. 競技規則書入門書について

～ルールブックの文面をかみ砕いた表現にしたいと思うものの、なかなか困難です。

サッカーでは、ルールブックそのものを渡していますか？

4級～1級まで、そのものを渡しています。通称ルールブックは、審判員のためではなく、競技者・指導者を含めた競技を理解するための「Laws of the Game」という捕らえ方をしており、基本的には、16歳未満、女子、35歳以上の年長者、障害者を除いて、同じルールで競技が行われています。しかし、1級の審判員でも難しい表現や表記が多く、噛み砕いたものが必要だと思えます。お隣の韓国では、漫画チックなイラスト中心のものを見たことがあります。もちろん、解説書の類には、分かりやすくしたのがありますが、JFAが出しているものはありません。Jリーグアカデミーは現在、その検討をしておられます。

## 2. 審判の手引きについて

～現在、私なりに、競技規則必携（ルールブックの補足説明書）から引用して作ってみたいですが、表現が難しかったり、ややこしかったり、ボリュームをどの程度にしたらいものやら困惑しています。

解説書は数種類出ています。もちろん、高校生や初心者向きの物もあります。

トップレフェリーとビギナーとはどうしても違うように思いますが。

## 3. モチベーションの喚起について

～夢と感動を与えるプレーと、スターや海外で活躍するプレーヤーの存在が、サポーターやファンの拡大をもたらし、マスメディアの露出度アップにつながっていますが、今のところハンドボールでは、サッカーのように審判員の活躍がクローズアップされることは殆どありません。そのような状況で、今後、モチベーションをどう持たせていくか、どんなコンセプトがあるのか、アドバイスをいただければ幸いです。

「どうやってヤングレフェリーのモチベーションを持たせるか」ということですが、これが最も難しい課題です。

幸い、サッカーは職業、プロ審判員が誕生したので、将来の職業選択肢の一つになっています。ただ、それはほんの一握りの人たちで、多くは自分のライフワークとして審判活動を行っています。その方々の活躍が日本のサッカーを支えているというのも事実です。そして、中学生や高校生を含んだジュニアユース（中学生年代）・ユース（高校生年代）審判員の育成は今後の日本のサッカーの発展にとっても大きなポイントです。

現状では、優待制度（JFA登録料1500円という割り安、笛・カード・競技規則など審判用具の無償提供、講習会の開催など）を実施しています。2006年5月現在、登録審判員数は、全国でジュニアユース約3600人、ユース約12500人だということです。

基本的に笛を吹くことができるのは各都道府県の、それぞれのそれ以下の年代、例えば、ジュニアユース年代は小学生年代、ユース年代ならばジュニアユース年代のゲーム担当できます。そして同年代ならば副審を担当できます。優秀なものは、各都道府県の審判委員会の許可と指導を得て、各地域（東北、関東など）のゲームも担当できるように なっています。

海外では、各クラブ（学校体育の部活ではない）の中で、高校生ぐらいから、プレーをやりながら、審判活動をしていることが多いということです。土曜日は、プレーヤーで日曜日はレフェリーでという感じで、おっしやる通り、間近でテレビで映っているトップレフェリーが指導に来たり、講習会を開いたりしているようです。日本でも、現在ワールドカップに参加している上川さんが、直接講習会に参加するような企画もあります。そこで、審判の魅力や面白さを語ってもらったり、一緒に笛を吹いてもらったりしています。

サッカーのレフェリーもゲーム中に罵声を受けたり、メディアに責められたりしています。基本的には、チームの、クラブの指導者の捕らえ方が大きいと思います。ゲームにとって重要な存在で、「レフェー：委ねている」という意識があるかどうかです。日ごろから、馬鹿にしたり、批判ばかりしている指導者のもとには、審判員を目指す人材が出てくるのは難しいでしょう。

現在では、技術委員会と協力して、「いいゲームを作る協力者としての審判」を呼びかけています。

最近では、メディアを活用し、審判の面白さや難しさ、ルールの解釈などを広げようと努力しています。理解者を増やすことも大きな要因でしょう。

以上、概略で申し訳ありません。

私より詳しい方も多いので、必要ならば、ご紹介させていただきます。」